

INFO SATAKE

2017 Autumn vol.10

日食優秀食品 機械・資材・素材賞を受賞



日本食糧新聞社・松本講二代表取締役社長より表彰状を授与

第20回 日食優秀食品 機械・資材・素材賞
第21回 業務用加工食品ヒット賞
第5回 地域食品産業貢献賞

今回受賞した「BELTUZA Xeno」は、2016年9月に発売した、農産物や食品、工業製品など幅広い原料に対応する多用途ベルト式光選別機です。色彩の違いによる不良品異物の選別に加え、形状の違いによる選別機能を搭載し、割れた原料や原料どうしが固着したものなども選別除去できます。さらに、近赤外線による選別機能



第20回日食優秀食品 機械・資材・素材賞
受賞ロゴマーク



選別の一例(枝豆)

食品分野で導入進む多用途光選別機「BELTUZA Xeno」
9月8日に開催された、日本食糧新聞社制定の「第20回 日食優秀食品 機械・資材・素材賞」表彰式において、サタケの多用途ベルト式光選別機「BELTUZA Xeno」が、機械部門での表彰を受賞しました。同賞は、食品界をバックアップする機械と資材、素材業界の力強い発展を期して、顕彰と感謝を表すために、日本食糧新聞社が1998年に制定したもの。対象製品は食品機械機器、包装資材のほか、添加物や香料、機能性原料、食品原料など、品質と効率の向上に役立ち、食品業界をサポートするすべての機械資材、素材です。



BELTUZA Xeno



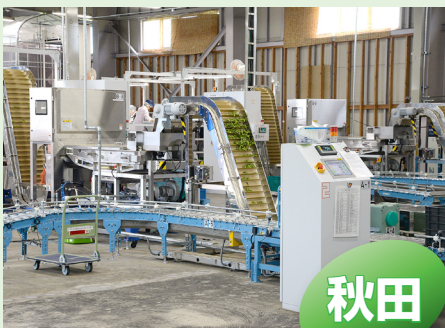
石破茂衆議院議員(右)とカメラに収まる
サタケ常務執行役員・増川和義(左)

を搭載し、原料と同色の石やプラスチック、陶器、ガラスなども選別できます。高い精度の選別性能と、衛生面メンテナンス面に優れたステンレスボディの採用などが評価され、発売以来、農産物食品分野を中心に国内外より好評を得ています。このような点が評価され、今回の受賞につながりました。

なおサタケは、2001年に無洗米製造装置「ネオテイスティ・ホワイト・プロセス」、2008年に「光選別機シリーズ」(マジックソーターなど)、2011年には農家用小型光選別機「ピ力選」で、同賞を受賞しています。

お客様インタビュー

JA秋田おばこ様／JA越後ながおか様



秋田

JA秋田おばこ枝豆選別施設

全国有数のコメ生産県である秋田県と新潟県。近年のコメ余剰傾向や米価下落などを背景に、農家所得の維持、確保が課題となっており、新たな収益の柱として「枝豆」に力を入れている。JA主導の環境整備により品質向上・生産拡大を目指す、両県の取り組み取材した。

生産拡大を阻む選別作業
「えだまめ日本」を目指して、産地の育成に取り組んできた秋田県。東京都中央卸売市場では、秋田県産枝豆が平成27年、28年と、取扱量日本一の連覇を達成した。「もつと秋田県産の枝豆を」と求める声に応じ、JA秋田おばこにおいても枝豆増産に取り組んできたが、その足かせとなっていたのが収穫後の選別作業。従来は個々の農家が夾雑物除去などの粗選別から、厚み選別、洗浄、脱水、本選別、計量、袋詰めまですべて



JA秋田おばこ
原喜孝 代表理事組合長

の枝豆にとって、これらの作業はまさに時間との戦い。特に本選別以降の工程はすべて手作業のため、収穫量が増える処理が追いつかず、次の収穫が遅れて莢がふくらんだり、黄ばみが発生して口入が増えてしまう。逆に言うと、選別工程の能力以上には生産量を増やせない状態だった。

選別工程を省力化し生産拡大へ

生産拡大のためには選別工程省力化が必要不可欠として、本年7月、「枝豆選別施設」の稼働を開始した。荷受から選別、計量、袋詰までの「貫ライン」を2ライン備えており、大量の原料も迅速に処理することができる。

選別工程で大いに威力を発揮するのが、サタケの多用途ベルト式光選別機「BELTUZA」。色彩に加え、形状の違いをも識別するため、変色した不良品はもとより、一部が欠けたものや一粒しか入っていない莢も、不良品と識別できる。光選別を行ったあとは、さらに人の目でチェックをし、微妙に変色した不良品などを丁寧に取り除いている。「一番手のかかる選別作業を省



JA秋田おばこ・えだまめ部会
佐々木義文 部会長

と胸を張る。

同JAえだまめ部会の佐々木義文部会長は「以前は収穫選別・出荷作業のために5〜6名必要だったが、選別施設ができてからは3名でできる。手が空いた分、防除作業に手が回るようになり、害虫被害を減らせた」と胸を張る。

余剰労働力で防除を徹底

効果は増産だけにとどまらない。選別工程を集約したことで、以前に比べ品質のばらつきが無くなり、同JA産枝豆全体の品質向上につながった。収穫遅れによる品質低下も防止できる。さらに、省力化によつて生まれた余剰労働力は本来の栽培管理に注かれ、さらなる品質向上へとつながっている。

手作業では限界を迎えていた選別作業

言わずと知れた、米生産量日本一の新潟県。実は枝豆作付面積が日本一、1世帯あたりの購入数量も日本一というほどで、非常に枝豆好きな県民性がうかがえる。県中央部のJA越後ながおかも、枝豆生産拡大に積極的取り組み。同JAでは、平成26年より枝豆の共同選別を始めた。背景にはやはり、収穫後の選別袋詰作業が規模拡大のネックになっている現状があった。

同JAの共同選別施設、昨年末



新潟

JA越後ながおか共同選別施設

では選別をすべて人の手で行っていたため処理が追いつかず、毎日約12時間かけてさばいていた。手作業では限界を迎えていたことから、今年、サタケの多用途ベルト式光選別機「BELTUZA」を導入した。

現在は、光選別機で明らかかな不良品を除去し、次に人の目で詳細にチェックをして、微妙な不良品を除去している。同じ量を処理するのにも半分近く時間短縮でき、選別にかかる人数も削減できた。その分、袋詰め工程の人数を増やし、施設全体として作業時間を3/4ほどに短縮できた。今では定時間内にすべて作業が終わる。

規模・販売拡大への布石を着々と

「共同選別施設ができてから栽培面積、農家とも増加している」とその効果を語るのは、同JA営農部園芸特産課の神林孝之主任。当初12ヘクタールだった管内での栽培面積は、4年間で27ヘクタールにまで拡大したのだという。「共同選別によつて品質面でも評価されるようになった。将来的には35ヘクタールを目標に、より高品質な枝豆の生産を拡大していきたい」と神林主任は展望を語った。



JA越後ながおか営農部
園芸特産課・神林孝之主任

と神林主任は展望を語った。

「サタケインターネットワークサポートシステム」サービスを開始

サタケは、穀物加工施設などの情報管理ができる業界初のクラウド型システム「サタケインターネットワークサポートシステム」を開発。9月1日(※)よりサービスを開始しました。

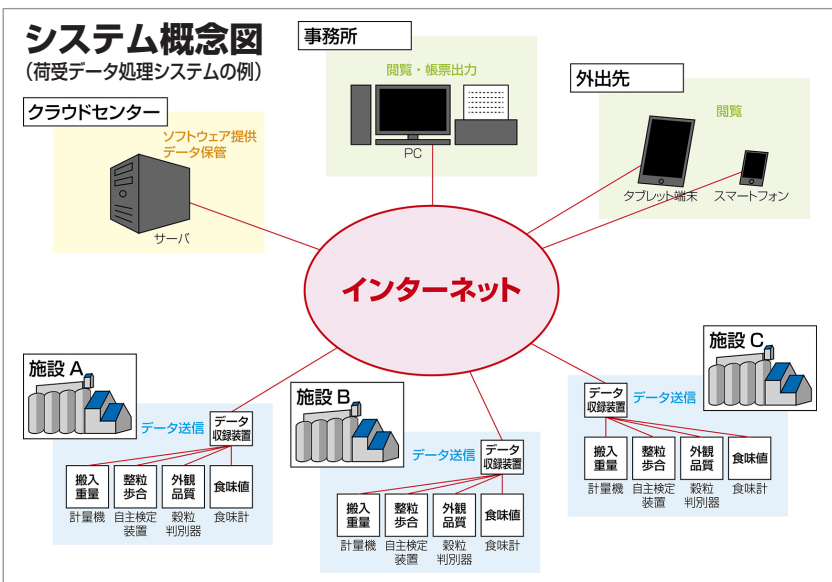
穀物乾燥調製施設(ライスセンターなど)や精米工場などでは、原料穀物の荷受処理や生産者への精算処理、設備稼働状況の監視など情報管理を行う場合、従来は専用ソフトウェアをパソコン(以下PC)へインストールして利用していました。そのため基本ソフト(OS)がバージョンアップした際はソフト

ウェアの入れ替えが必要となり、利用者の負担となっていました。また、データのバックアップは利用者自身で行う必要があり、適切に行っていない場合、破損や消失のリスクが生じていました。

このたび開発したクラウド型システムは、情報管理に必要な6つのサービス(①荷受データ処理システム②精算処理システム③保有米処理システム④施設利用予約システム⑤穀物温度モニター⑥遠隔工程監視システム)をインターネット経由で提供するもので、PCに専用ソフトウェアをインストールすることなく、ウェアラブルで利用できます。クラウド型システムのサービス提供は、穀物加工施設向け情報管理システムとして初めてです。

同サービスは、インターネットに接続されている端末であれば、PCだけでなくタブレット端末やスマートフォンなどモバイル機器からも利用できます。常に最新のソフトウェアに更新されるため、OSのバージョンアップに伴う利用者の負担は不要です。サーバに保存されたデータは括弧してバックアップされるため、万が一端末に破損消失などのトラブルが生じてもデータを保護できます。また、保存されているデータは遠隔地からも閲覧・処理できるため、複数施設を運用する場合も現地に足を運ぶことなく、最新の情報を効率よく収集分析することが可能です。

※1…荷受データ処理システムは2016年5月より先行してサービス提供中



「SCAJ2017」に出展

9月20日からの3日間、東京ビッグサイトでは「SCAJ ワールドスペシャルティコーヒーカンファレンス アンド エキシビジョン2017」が開催されました。同展示会は、一般社団法人日本スペシャルティコーヒー(SCAJ)協会が主催し、国内外のコーヒー関連企業が最新の技術サービスを紹介する、アジア最大級のスペシャルティコーヒー(高品質コーヒー)展示会で、サタケは光選別機「ピラ選α PLUS」などの展示実演を行いました。

近年アジアではコーヒー市場が拡大するとともに、豆の焙煎度や選別品質管理にこだわる高品質化が進んでいます。特に、焙煎状態の悪い豆などは味覚に悪影響を及ぼすため、スペシャルティコーヒーの豆を扱う輸出入・加工業界では、品質向上を図る手段として、不良豆を選別する光選別機の導入が進んでいます。今後も、コーヒーの大産地であるベトナムをはじめ、アジア各国へのさらなる市場開拓を目指し、光選別技術の認知普及に努めていきます。



選別前後のコーヒー豆を見比べる来場者

「FASE関西2017」に出展



10月11日からインテックス大阪にて開催された食品工場自動化・安全機器展「FASE関西2017」に、サタケは豆類・食品などに対応した各種選別機や検査機器を出展しました。

安全安心への意識の高まりから、食品業界では選別検査工程の充実に注力しています。一方で人手不足を背景に、省力化や生産性の向上が喫緊の課題。サタケは選別技術などを通じ、今後もお客様の課題解決に役立つ提案を行っていきます。

「2017酒まつり」サタケ本社でもイベント開催

10月7、8日の両日、東広島市で開かれた恒例の「酒まつり」にサタケは企業参加し、広島本社内においてイベントを開催しました。特設ステージでは、地域の伝統芸能やダンス、バンド演奏などが披露されたほか、地元産品が一堂に集結する「心のふるさとマーケット」や東広島最大のフリーマーケットなどが開催され、多くの来場者でにぎわいました。



JA四万十管内の特色

「日本最後の清流」と呼ばれる四万十川。その中流域に位置する四万十町の窪川地域と中土佐町の大野見地域がJA四万十管内だ。町の中心となる窪川地域は標高2300メートルの盆地で、約2000ヘクタールの農地を有する県内で有数の穀倉地帯である。気候は、南国高知のイメージとは異なり、昼夜の寒暖の差が激しく、冬場は氷点下になることもあるという。

「昼夜の大きな温度差が良食味米を育み、JA四万十の米は県内で大変おいしいと評価が高い。他にも、日本の生産量を誇るシロウガをはじめ、ニラ、ミョウガ、ピーマンなどの園芸作物や約3万頭の養豚などが盛んな農畜産業の町である」JA四万十代表理事組合長の武政盛博氏はそう胸を張る。その言葉通り、基盤整備率は80%に達し、「ヒノヒカリ」「十和錦(香り米)」「にこまる」などの品種を管内約1300



JA四万十CEの全景

ヘクタールの水田で生産している。中でも「にこまる」は、平成28年度米食味ランキング(日本穀物検定協会)で高知県初の特Aに選ばれ、また昨年12月の第18回米食味分析鑑定コンクール国際大会においても、「都道府県代表お米選手権」の金賞を受賞している。養豚も、四万十のおいしい米を飼料として与えたコメ豚がヒットするなど、栽培・飼育に適した気候風土に加え、創意工夫や努力を惜しまぬ取り組みが、米野菜畜産で三位体の成果を上げていると言える。

高知県唯一のカントリーエレベーター



新設の光選別機

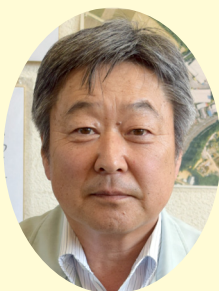
「のカントリーエレベーター(以下、「CE」)を保有していることだ。このCEは、1988年に竣工した処理能力3000トン。建設当初の様子やその後の状況を販売推進課長の川村陽三氏に尋ねた。

当時、農業の機械化が進み兼業農家が増えたこと、今摺り米をアピールしたかったこと、この地域は雨が多く不順な天候であることからCE導入の機運が高まり、サタケが施工した。その後、JA管内では集落営農化が進み、農家戸数は減少するなど、農業形態環境が変化する中、CEは旧態依然として次のような問題を抱えていた。

①「ヒノヒカリ」と「にこまる」の刈取り荷受けシーズンが重なり、乾燥機の処理能力や操作性・性能面から同時に2品種を荷受けできない状況であった。「にこまる」は県の奨励品種としてブランド化を目指し

ていたため、同時荷受けが喫緊の課題であった。

②近年の気象条件などにより稲こじ病が発生し、品質向上には光選別機の導入が必要とされた。



川村陽三 販売推進課長

これらの問題解決のため、2016年に「にこまる」専用の循環式乾燥機「ドライドーム」(処理能力60トン)および光選別機の導入を決定した。同年8月に改善工事を開始し、翌年2月6日に完工した。

本年8月の盆明けから稼働を開始したが、川村課長は「全量一等米にして品質向上を図りたい。初搬入時の待ち時間軽減を図り、併せて一般職員も協力しCE利用農家へのサービス向上に努めたい。販売面では特A認定をバネにさらに拡大したい」と意気込む。

JA四万十の志と矜持

良食味米をはじめ、園芸、畜産で地域農業の活性化を推し進めるJA四万十だが、根底にはJAの存在意義と地域の

一体化を重視する姿勢がある。「農業とは、国民の食料を守ると同時に命を育む産業」と武政組合長は語る。そのうえで、「自然人・地域が共生できる取り組みを重視して、地域農業がさらに発展できるようJAとして貢献していく」(同)としている。理想論だけでなく「販売高を意識した地域振興が大切」(同)とも。

また、食と農を基本とした教育文化活動にも力を入れている。地域の小学生を対象に「食と農を子どもたちに身近に感じてもらいたい」と農業体験「あぐりスクール」を開催し、これまで14回(年一回)実施している。「JAはその地域の中心であり、行政ができないことでも地域が一体となれるよう、幅広く入り込んで活動することが大切」(同)という。

最後に武政組合長の「JAは農業だけではない。ライフラインである」と熱く語る姿に、JA四万十の志と矜持を見ることができた。



「にこまる」と「ヒノヒカリ」

お客様インタビュー 高知県四万十町／JA四万十 様



武政盛博 代表理事組合長